Anemo i ～アネモイ～

かるピス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ａｎｅｍｏｉ～アネモイ～

【Ｎコード】

Ｎ８７２２Ｚ

【作者名】

かるピス

【あらすじ】

風の大神エウロス。世界の管理者であった彼は、部下達から強制的に休暇を取らされることになる（１００年くらい）。同時期に、勇者が召喚されていたり、世界中で厄介ごとが起こっていたり。流されやすい（風だけに）性質である彼のバカンスは、どんなものになっていくのか！！

第０話（前書き）

性懲りもなく、始めてしまいました、オリジナル。
暇つぶし程度に読んでいただければ幸いです。

第0話

世界には、人間が知らない領域が存在する。

燃え盛る火山の中の火炎竜（サラマンダー）の集落。
激烈な海流の内側にある人魚（マーメイド）達の楽園。
天を貫くかのように聳（そび）え立つ霊峰グラン・ノルドの山頂にある有翼人（セレスティア）の街。
徘徊する天災、破壊の権化、巨竜（ドラゴン）ベヘモットの体内に造られた、小人（ラクル）達の隠れ家。

世界には、人間が知ってはならない領域が存在する。

天上にある、上位神の御殿。
地底の奥底の、大悪魔の幽閉所。
次元がずれた場所にできる、＞誰もいない街（ブロークン・ファンタズマ）＜。
触れた者を死の楔から解き放ち、同時に生の手枷からも突き放してしまう＞命の湖（デッドレイク）＜。

そんな、在るかどうかも分からない、一部の冒険者（ロマンチスト）だけにまことしやかに囁かれる、伝記伝説口伝え、神話怪談秘境魔境。

それは、そんなものの一つであった。

東西南北に分かれた大陸。
それらの真ん中に位置する大海、中心洋（セントラル・オーシャン）。
その大海の、さらに中心に停滞する、剣霧（ソードミルキー）。
不用意にその霧の中に入ったものは、例外なく八つ裂きにされる危険な霧。

何者の進入をも許さない自然の猛威。
その霧の中心には、世界の精霊が集う、集会所がある、と。
そういう、言い伝えであった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

「それでは、これより報告会議を開始する」

荘厳な雰囲気の部屋の中で、ふっとそんな声がした。
否、部屋というよりも、そこは洞窟といったほうがいいかもしれない。
自然のままに出来た、大きな広々とした空間。中には、巨大な燭台がひとつ、煌々と辺りを照らしていた。
光源は燭台しかなく、その場を全て照らし出すことはできていなかった。
それでも、その照らし出されているところを見ると、地面や壁の所々に様々な絵が描かれていたり、火に照らされて、光っていたりする部分があった。
絵の内容は多岐に渡り、単なる動物の絵から、おぞましい怪物の絵、人型の生き物の絵、それらが入り乱れて争っている絵だったりした。
世の学者が見たら狂喜乱舞するか、夢かと自らの目を疑うに違いない。
それらの絵には、この世界のこれまでの歴史が細かく描かれ、壁に光るいくつもの鉱物は、希少などという言葉では言い表せない、まさに神代の、伝説などでしか伝えられていない物の数々であった。

「まず、『北の暴風』ボレアス」

「イエス、リーダー」

声が言う。
その青年のような声に答えたのは、荒れ狂う吹雪のような、荒々しい男の声。
全てを薙ぎ倒すまで動くのを止めない、そんな意思が感じられる声だった。

「北では大きな戦争もなく、ニンゲンは概ね去年と同じような状態でさぁ。ただ、寒気がきつくなったせいか、植物の育ちが悪くなり、動物達が数を減らしてきている。ニンゲンどもに狩られているのも原因の一つで、それにより、氷狼（フェンリル）の一族が不穏な動きをみせてるようで」

「氷狼（フェンリル）、か。やりすぎないよう忠告はしておけ」

「イエス、リーダー」

端的に指示を出す青年の声。
そこには、人間と氷狼（フェンリル）との衝突に対する、どんな感情も見出せなかった。

まるで、予定調和で在るかのように続ける声。

「次、『西の清風』ゼピュロス」

「はーい、御方」

答えるのは、暖かさに満ちた少女の声。
弾むような喜びと、包み込むような慈愛に溢れた声であった。
「西方では現在＞聖王国＜ゴアと亜人たちが戦争中ですぅー」
緩い声で告げられた内容は、しかし彼女の声のイメージに反して、血なまぐさいものだった。
「ゴアの王族達はー、亜人獣人は人間の劣化種だと考えてるみたいでー、彼らを奴隷として大量に捕まえたりしててー、それに怒った金毛族の首領が宣戦布告してー、それがさらにほかの亜人たちにも飛び火したみたいですー。他は問題ありませーん」
「……またゴアの連中か。確か１００年前かそこらにも同じようなことをしてなかったか？」
「正確には９２年前ですねー。そのときには亜人たちに負けてたのにー、よくやりますよねー」
けらけらと笑う少女の声。
戦争によって失われるヒトの命など、もとより考えていない、といった感じだ。
「……ふん。まぁいい。基本そちらには不干渉だ。ハデスやペルセポネの仕事は増えるだろうがな。
次だ、『南の鋭風』ノトス」
「了解です、主上」
答えるのは、鋭い雰囲気を纏った、女性の声。

自己を貫く強い意志、他を切り捨てる暴虐の声の裏には、燃え上がる情熱が隠されている。

「南方では、猿人(エイポス)達による下位のドラゴン種の討伐が相次いで行われております。雄の成体はもちろん、雌も、幼体のドラゴンも、容赦なく全て殺しつくす勢いでの討伐であり、生態系に大きな変調を来たす恐れがあります。よって私(わたくし)『南の鋭風』ノトスは猿人(エイポス)達の大幅な数減らしによってバランスをとりたい所存というかもういいからあの猿どもを私にぶち殺させてくださいお願いします主上あいつら私が目をかけていた若いドラゴンを狙いやがってふざけんな殺す殺す殺」

「落ち着けノトス」

青年の声にハッとしたように呪詛の羅列を止める女性の声。

ん、んん、と咳払いらしきものをして、続ける。

「と、とにかく、なんらかの手段を打たない限り、南の下位ドラゴンは全滅してしまうでしょう。それから、例年通り、南での戦争は後を断ちません。今は＞魔術大国＜シェランと＞戦闘機械国＜ジェノスとの戦争ですね」

「……相変わらず、お前の管轄は面倒ごとばかりか」

うんざりしたような雰囲気を放つ青年の声。

主上、と慕う者にそんな声を向けられたからか、女性の声は幾分焦ったように言い足す。

「あ、あ、えっと、そ、そうです！！＞魔術大国＜シェランが、勇者召喚に成功したとか！！」

「勇者、召喚？」

どうです、いい話題でしょう！？と嬉しげに報告する女性に、……ハァ、と嘆息する青年。
テンションの壁がすごい勢いで離れていっている。

「……勇者召喚が行われた際は、その世界の管理者、つまりは俺が、世界に過ぎた影響を与えないように忠告しなければならないのだが」

「……あ」

今気付いた、みたいな声を出す女性にむかって、深い深いため息をつく青年。
と、そこで、横から声がかかる。

「ガッハハハハ！！まぁいいじゃねぇかリーダー！！今回の勇者は可愛い女の子だって聞くぜ！？リーダーの趣味にぴったりじゃねぇか！！」

「……ボレアス。会議はまだ終わっていない。口調を戻せ。それと、変なからかい方をするな。ノトスがまた壊れた」

荒々しい声に向かって言う青年。その横では、女性の声が愕然とした雰囲気を出して静止していた。

「もう報告は終わったからいいじゃーん。御方ー」

そんな声がして、洞窟内に暖かい風が集まったかと思うと、その中

心に、１４歳ほどの外見の少女が立っていた。
緑色の、腰までかかった髪。腕のいい彫刻師が人生の間際に最高傑作として彫ったような、完璧かつ愛嬌のある顔。白いワンピースを着て、神秘的な雰囲気を醸し出した少女。

『西の清風』ゼピュロスである。

続いて、風が吹き荒れ、それぞれ３つの中心点を形成したかと思うと、ふっと現れる３人。

最も背が高く、がっしりとした体格を持つが、やはり美丈夫というに相応しい顔をした男。
髪は白く、短く刈り上げている。

『北の暴風』ボレアス。

背の低いゼピュロスと、２m以上は確実にあるボレアスの中間くらいの身長であり、これまたゼピュロスとは違うベクトルで整った、美の体現者といっても過言ではないくらいの容姿。
紅い、肩まで伸びた髪をサッと払う姿が、冷たい雰囲気を醸し出している女性。

『南の鋭風』ノトス。

そして、ノトスより少し背が高く、凛々しい顔立ちをした青年。
黒い髪をもった彼が、口を開く。

「お前は少し自由すぎるぞ、ゼピュロス」

彼に答えて、少女は言う。

「これ以上やることはないでしょー？そ、れ、にぃー」

悪戯げににんまりと笑みを浮かべ、その後しなをつくって青年に近づく少女。

１４歳の小娘がやるには少々色気が足りないと思われる行動も、彼女が行うと妙に似合っている。

目を熱っぽく蕩けさせ、言う。

「……御方はー、わたしにぃー、会いたくなかったー？」

「んなっ、なにをしているのだ貴様は主上に向かって！！」

「なにってー、愛情表現？」

「明らかに誘惑しておるではないか！！」

「ノトスにはできないもんねー？」

「っ！！この小娘が！！」

「おっとー。小娘って言っても外見でしょー？歳は一緒だもーん」

風を飛ばしてゼピュロスを追いかけるノトスと、きゃーきゃー言いながら軽々とノトスの追跡を避け、からかい続けるゼピュロス。

完全に、この二人の力関係がわかる構図である。

「……全く。俺はこの後勇者の確認に行かなければならないというのに、こいつらは」

頭に手をあてながら言う青年。
苦労人である。

「別にんな急ぐことはねぇだろリーダー！！ここらでバカンスでも取っちゃあどうだい！！？」

「そんなものを取っている時間はないだろう。俺の分の仕事は誰がやるんだ」

「カイキアスとアペリオテスに任せりゃいいじゃねえか！！リーダーのためならそん位やるだろ！！」

「って！貴様も何を言っているのだボレアス！」

ちゃっかり部下に任せようとしている男に、ノトスが突っ込む。

「彼らにも仕事はあるのだぞ！？分かっているのか！」

「でもー、御方だけ１０００年位ずっと働き通しだよねー？」

いつの間にか、追いかけられていたはずのゼピュロスが、青年の手を取って話していた。

「まぁーそりゃ御方は立場上休むのは難しいかもだけどー、でも１０００年休みなしはきつくなーい？」

「うっ」

さすがにここではゼピュロスの方が正しいと思ったのか、反対していたノトスがひるむ。

ここぞとばかりに、ゼピュロスが言い募る。

「それともー、ノトスはー、御方に休むなっていってるのー？」

「うぅっ！？」

ゼピュロスの口撃に、膝を屈するノトス。
それを見かねて、青年が言う。

「いや、俺は別に休みたいわけでは……」

「そうと決まれば依代（よりしろ）を用意しねぇとな！！」

「やっぱりー、ニンゲンの姿がいいよねー」

「主上！！わ、私は、主上に休むななどと思っているわけではっ！」

が、ノリノリの二人は聞く耳を持たず、ノトスはありもしない誤解を解こうと必死で声が届かない。

「バカンスのついでに勇者に確認とってくりゃいいだろ！！」

「そうだねー。顕現する場所はどこがいいかなー？」

「主上！！信じてください！！主上ーーー！！」

「……」

こうして、＞世界の風（アネモイ）＜トップにして、風の大神、＞東の万風＜エウロスのバカンスが、半ば強制的に、決定されたのだった。

第０話（後書き）

感想、アドバイス等お待ちしております。

第一話　顕現　そして

『やはり早めに勇者への忠告をしたほうがいいでしょうから、私（わたくし）の管轄である南の大陸のどこかでの顕現がいいと思われます』

『＞魔術大国＜シェランの首都には風の聖域はないからー、ちょっと離れたところにある草原になるかなー？』

『依代は用意できたぜリーダー！！外見はそのままに、スペックはニンゲン並みに！！いやー、リーダーの力を抑えるだけの依代作りにゃあ、苦労したぜぇ！！』

「……で、今に至るわけだが」

＞魔術大国＜シェランの領内ギリギリに存在する、風下草原（リワード・プレーリー）。

外界魔力が高いため強力な魔物が出る事で、冒険者達や一部の研究者達の中で有名である草原。

３６０。見渡す限り全て原っぱである場所に、一人の青年が立っている。

黒い髪、高めの身長、凛々しい顔つき。

派手ではないが仕立てのよい服を着て、たった一人危険地帯にいる彼。

きりっとして街の中で立っていれば、さぞかし女性に騒がれているであろう、神々しささえ覚える容姿を持つ彼は、しかし今現在、妙にへたれた雰囲気で佇んでいる。

「俺のために言ってくれたのだと言うことは分かっているのだが…

……」

どうして俺の部下は皆、人の話を聞かないのだろうか、と嘆息する彼。

風の大神、＞東の万風＜エウロスの擬似身体、依代である。

「とにかく、勇者への忠告だ。……その後は、ありがたく休暇を取らせてもらうとしようか」

そう言って、歩き出す青年。

武器も防具も持たず、一見無防備に見える彼の周囲に、風が一筋、纏わり付いていた。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「全く面倒な」

なんの感慨も無さそうな声でそういって、腕を振るう青年。

その腕の先にいた、頭部が大きな、緑色の巨大なトカゲが、何の前触れもなく上下二つに分かれる。

Aランクに分類される魔物、＞ステップリザード（亜種）＜、しかも風下草原（リワード・プレーリー）の外界魔力によって強化されている個体を、簡単に絶命させているこの状況。

世の冒険者達が見たら卒倒物である。

しかも、青年の周囲には同じ魔物の死体がいくつか転がっている。

どうやら、＞ステップリザード（亜種）＜の一家の縄張りに入り込んでしまったようである。

普通ならば、一匹に対して冒険者一パーティーで挑むほどの魔物を、青年一人でリザード６匹を倒してしまっている。
明らかに異常な戦闘力である。

自分が殺したトカゲ達を俯瞰して、青年が口を開く。

「……これで何度目だ？いい加減鬱陶しくなってくるぞ」

彼の苛立ちを示すように、風が、ゴウッ、と吹き、＞ステップリザード（亜種）＜の死体を吹き飛ばす。

「いくらなんでもエンカウント率が高くないか？」

首を傾げたまま歩き出す青年。
エウロスが顕現してから、３時間ほど経っていた。
風下草原（リワード・プレーリー）のほぼ真ん中から、彼が目指す＞魔術大国＜シェランの首都まで、徒歩で約５日ほど。
初めにそれに気付き、彼が愕然としてから、３時間。
この間に、彼は先ほどのような戦闘とも呼べない圧倒的な蹂躙を、７度ほど繰り返していた。
彼のせいで、風下草原（リワード・プレーリー）の生物存在数がガンガン低下している。
そもそも、人間の姿で顕現しているのに、風を使いまくっていていいのだろうかという疑問があるのだが、それは置いておいて。

どうも、エンカウント率が高すぎる。
何なのだろうか。まさか、ボレアスがこの依代になにか細工したのではないだろうな。＞幸運＜Ｅとか。

そんなことを考えながら歩き出すエウロス。
速度が異常である。

一歩踏み出すごとに軽く１０メートルは進んでいる。
これは、彼の足がおかしいほど長いのではなく、一つの、風の魔術である。
＞魔術大国＜シェランの魔術師達が見たら、口を揃えて言うだろう。
個人でアーティファクト以上の効果を出すとか、バカなのか、と。
歩いている格好で、馬など相手にもならないほどの速度を出しているエウロス。
エンカウント率の高さは、この速度にも関係している。
自分の縄張りに、得体の知れないものすごく速いモノが入ってきた。
縄張り意識が高いかつ知能が低い魔物は、これを排除しようとエウロスの進行方向に移動し、待ち構える。
そして、エンカウント。蹂躙開始。というわけだ。

閑話休題。

これが本物の競歩だぜヒャッハー、とばかりに爆走（爆歩？）し、蹂躙してきたエウロス。
現在の場所は風下草原（リワード・プレーリー）の端の端、もうすぐ草原を抜ける、というくらいの地点である。
無駄に広い原っぱを抜け、もうすぐ森に入る、というところで、身体に異常を感じる。
腹が締め付けられるような、妙な感覚。
依代に入る前には感じたことのない、初めての感覚。

「……なんだ？また問題か？」

欠陥だらけかこの依代。休暇が終わったらボレアスシメる。

などと思いつつ、自身に＞鑑定＜をかけるエウロス。

出てきた結果は、

体の状態：空腹

「……まじか」

言って、うんざりしたような顔をする彼。

すっかり忘れていたようだが、人間は、食事をしないと腹が減る。

最悪。餓死する。

「そこまでのクオリティーは必要ないぞ、ボレアス……」

脳裏によぎるのは、いい笑顔でサムズアップする白髪の美丈夫。

休暇が終わったら、絶対ボレアスシメる。

そんな決意を固め、食料探しを決行するエウロスだった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「走れ！！絶対止まるなよ！！喰われんぞ！！」

わたしの後ろで殿を務めているクレアが、走りながら叫ぶ。

分かってるわようるさいわね！！といつも通り返したいところだったが、そんな余裕もない。
息も絶え絶えに、ただひたすら走り続ける。
わたしの前を走るのは、＞レンジャー＜のラキと、＞神官（クレリック）＜のリエ。
二人とも、わき目も振らずに走っている。
っていうか、なんでリエは回復役の＞神官（クレリック）＜なのに、あんなに余裕そうに走れているのだろう。緊張はしているが、疲労はしていないように見える。
＞魔術師（キャスター）＜であるわたしは、もうへとへとである。
走っているだけで死にそうだ。
……最も、止まったら本当に死ぬのだが。

「もおおおぉ！！クレアが巣ごと殲滅しようとかいうから！！」

「仕方ねえだろ！！ボス級がいるとは思わないし！！お前も賛成してたろ！！？」

走りながら怒鳴りあうラキとクレア。
そのスタミナが羨ましい。わたしにちょっとよこしなさい。

「……ッ＞大地の縛り手（アースバインド）＜！！」

走りながら、詠唱短縮して魔術を放つ。
地面から土で出来た手が飛び出し、先頭の＞フォレストウルフ＜を縛り付ける。

「おおっ！！よくやったポポー！！地味に時間稼ぎだぞ！！」

地味って言うな！！そう言おうとするが、やはり声は出せない。
疲労が、溜まり過ぎている。

生きて帰れたら、ランニングして体力をつけよう、と、心から思う。
そう。生きて帰れたら、だ。
先ほどかけた＞大地の縛り手（アースバインド）＜が破られる。
先頭の一匹が止まって、後続の何匹かとぶつかったみたいだけど、
やっぱり大した時間稼ぎにはなっていない。
後ろから追ってくるのは、森の狩人＞フォレストウルフ＜が１０匹
ほど。それに、巣の中にいた、ボス級の個体、＞フォレストウルフ・
リーダー＜。
草原のウルフ種よりは遅いとはいえ、着実に距離を詰められている。

「みんな！！右のほう！！岩の隙間があるよ！！」

リエが叫ぶ。
みると、隙間というよりは通り道といった方がいいくらいの幅の道
が、岩と岩の間に出来ている。
あれなら、一匹ずつで相手にできる。
申し合わせたように、全員が岩と岩の間に滑り込もうとする。
前の二人が入り終え、わたしが入ろうとしたとき、

「ッ！！こ、の！！犬コロが！！」

後ろにいたクレアが叫んだ。
振り向くと、愛用のハンマーを＞フォレストウルフ＜に叩き込んで
いるクレアと、

彼女の肩甲骨辺りにはしる、四本の爪痕。

「「「ッ！！」」」

そこからは一瞬の行動だった。
ラキが戻ってきてクレアを引きずり込み。
リエがクレアに＞回復（ヒール）＜をかけ。
わたしが道の入り口に＞大地の遮り《アースウォール》＜をかけ、
＞フォレストウルフ＜が入ってこないようにした。

「痛っつ〜！」

「ばかなのあんた！！なに攻撃くらってんの！？」

「しょうがねぇだろ！！あいつら速いんだもん！！」

「ちょっ、喧嘩しないで〜」

言い合うラキとクレア。
止めようとおろおろするリエ。
いつもの光景である。ここに、わたしが加わったりもするけど。

「ス、スト、ストップ。…ハァ…ハァ……と、とにかく、たい、たいせいを、と、ととのえ、……けほけほ！うぅ……」

「「「いや、体力無さ過ぎでしょ」」」

わたしも止めようとして、３人に突っ込まれる。

あぁ、息が、息がくるしいよぅ。

「……この者に天の加護を。＞回復（ヒール）＜」

リエがかけてくれた＞回復（ヒール）＜で、大分楽になる。

「……さぁ！！反撃よみんな！！」

「いやいや、無理あり過ぎだろ」

「必死に誤魔化そうとしてるね」

「が、頑張ってポポーちゃん！！」

雄雄しく指揮を執ろうとして、あっけなく撃墜。

……何を頑張れって言うのかな、リエは？

「まぁいい。とにかく、このまま一匹づつ相手してけば、何とかなんぞ！！」

「奇跡だね！あたしもう死ぬかと思ってたのに！！」

「神の思し召しです！！」

チャンスが出来て、士気が上がるわたし達。

現金なものだと思うが、それでいいのだ。

だって、冒険者だもん！！！

「よし、おれはこっちの方の前衛。ラキは、反対側に来た奴を相手に。後はいつも通りだ！生きて帰るぞお前ら！！」

「「「了解！！」」」

リーダーであるクレアの号令。
いつもは乱暴だけど、こういうところでは頼りになる彼女を前にして、戦闘態勢。

「じゃあ、＞大地の遮り《アースウォール》＜、解くよ！」

いって、魔力を送るのを止めようとした、その時。

右側の岩が、吹き飛んだ。

「「「「……へ？」」」」

四人で同じ反応をしてしまう。
そして、右側と同じように吹き飛ぶ左側の岩。

目の前にいるのは、左の前足を振りぬいた状態で悠然と佇む、巨大な＞フォレストウルフ＜。
＞フォレストウルフ・リーダー＜である。

周りを見渡せば、いつの間にかわたし達を囲むようにして円を描いている＞フォレストウルフ＜達。

――――ウォォオオオンンン！！！

勝ち誇ったかのように吼える、＞フォレストウルフ・リーダー＜。
ドシン、ドシン、と、わざとゆっくり近づいてくるその姿に、わたし達は魅入られたように立っていた。

運がよかったと思った。
策がうまくいったと思った。
何とかなると思った。

生きて、帰れると思った。

それも無理なようだ。

右前足をゆっくりと上げる＞フォレストウルフ・リーダー＜。

死ぬときは、目を瞑らない。
せめて、自分を殺した相手を、よく見れるように。
そんな覚悟をして、しっかりと前を見据える。

やがて、時が来る。

＞フォレストウルフ・リーダー＜が、足を、ふりおろし、

そのまま、横に吹き飛んだ。

「「「「「……え……？」」」」」
本日二度目の、四人揃っての反応。
その硬直を解いたのは、男性の、声だった。

「そこの娘四人に、問う」

いっせいに、声が聞こえた方を見る。
森の奥から、人影が見えてくる。
背の高い青年。
凛々しい顔つき。
ゆがめられた眉。
派手ではなく、しかし仕立ての良い、センスを感じさせる服。

神々しいほど、整った容姿。

わたし達を囲んでいる＞フォレストウルフ＜達を見渡し、深刻そうな顔をして。
彼が、口を開く。

「このウルフ種は、食べられる生物か？」

第一話　顕現　そして（後書き）

感想、アドバイス等お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8722z/

Ａｎｅｍｏｉ～アネモイ～

2011年12月29日12時51分発行